

「インテリジェンス」——英語をことさらに使っているわけではないのですが、不便なことにはびったりの日本語がないのです。「インフォメーション」も「インテリジェンス」も訳してしまえば「情報」、誤りではありません。ところが英語では似て非なるものです。「インフォメーション」は雑多で膨大な生の情報を意味し、一方の「インテリジェンス」は、決断の拠り所となる情報の蒸留水です。大文字で始めれば「神の知」。拙著『ウルトラ・ダラー』（新潮文庫）には、主人公の情報部員ステイブンがテムズ川の畔を歩きながらオックスフォード大学の恩師に「インテリジェンスとは何を意味するのですか」と尋ねる場面があります。秘密情報部の幹部である恩師は、「よくぞ私に訊いてくれた」と河原の石ころを指差します。練達の情報士官が高みから心眼を凝らして見つめれば、石ころのなか

神の知のひとしずく

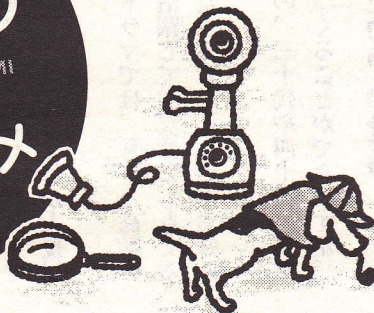
手嶋龍一

1949年、北海道生まれ。元NHKワシントン支局長。2001(平成13)年の米同時多発テロ事件で11日間の昼夜連続中継放送を担う。2006年、日本初のインテリジェンス小説『ウルトラ・ダラー』を発表。最新ノンフィクションは『ブラック・スワン降臨 ～9.11-3.11インテリジェンス十年戦争』。

外交ジャーナリスト、作家

手嶋龍一

嗜好の
SHIKO NO TANOSHIMI
愉しみ



イラストレーション……阿部千香子

にひとときわ輝きを放つ原石に気づくはずと論じます。それらを選び抜いてつなぎあわせると、情報のエッセンスが浮かび上がってくる。その一滴こそ「インテリジェンス」なのです。「インテリジェンス」は言葉の形をとらないこともあります。かつて政権党の実力者が記者会見で「中原に鹿を逐う」と総裁選への出馬を表明しました。本人はそれより以前に決意を固めたはずで、その瞬間を捉えることが僕ら政治記者の仕事です。密やかな決意は、たばこを呑み、コーヒーをすする、その仕事の微かな変化に表れます。日頃から接している人物の、ちょっとした異変を手掛かりに、政治家の心象風景に分け入っていく。私自身も紫煙やウイスキーグラスに生じた変化をヒントにニュースを伝えたことがよくありました。

系譜と、言葉を越えた見立てを大切にしているイギリスの系譜がありましてね。日本のインテリジェンス文化はどちらかといえばイギリス型ですが、こつちの方が難易度はずっと高い。情報源と直に会い、何事も見逃すまいと、インテリジェンス感覚を研ぎ澄ましていなければなりません。近頃はインターネットがいきわたり、若い人たちは人と会う前に反射的に検索サイトに手を伸ばしてしまう。私は努めてそうしないよう自らに言い聞かせています。サイトで先入観ができてしまえば、観察眼が濁ってしまいます。なによりネットの情報には間違いが多いですからね。いくら僕がこう言っても信じたくないのです、村上春樹さんが「インターネットでは本当を知りたいことはわからない」と書いていますよ、という若い方々も「なるほど」と納得してくれそうです(笑)。(談)

ひととき

のを
JIT